

キリスト教教育と私 (3)

塩野和夫

3

(1)

1965(昭和40)年4月、同志社香里中学校に入学した。入学に先立ち、3月中に済ませておかなければならない事がいくつかあった。母に連れられて、学生服・学生帽・革靴・革鞆・体育館シューズを買いにそれぞれ学校指定の業者に出かけた。学生服は上着もズボンも大きめで相当ゆとりがあった。革靴は初めてで、足のサイズと合わせるために履いてみただけで緊張した。革鞆を手を持つと、それだけでずっしり重かった。私服だった山田小学校とは何もかも違っていた。入学当初、授業料は1か月5,000円程度だった。それでも、半年分の授業料・入学金・施設費を合わせるとかなりの金額になった。支払いに行った母は、「同志社は大変や。何やかやでお父ちゃんの1か月分の給料が飛んで行ってしまう」と笑いながらぼやいていた。3月末にバスと電車の定期券を購入すると、入学準備の買い物は終わった。父は入学に先立って4,900円で腕時計を買ってくれた。その頃父は腕時計を持っていなかったの、父の気持をずっしりと感じさせるプレゼントだった。中沢のお兄ちゃんはパーカーの万年筆を入学祝に贈ってくれた。あれこれと入学準備を進めるうちに、同志社香里中学校への期待と不安に心は膨らんでいった。

入学式当日、制服を着て制帽をかぶるとぶーんと新しい服の匂いがした。革靴を履き、鞆を持って玄関を出る時、外がまぶしいように感じた。近所の誰かに声を掛けられたら、なんと答えればよいのか一瞬戸惑った。幸い誰に会うこともなく、黒いスーツを着た母とバスと電車を乗り継いで、香里園の駅に着いた。そこには同じような服装の親子が何組もいて改札口を出ると歩いて行かれたので、同じように歩いた。入学式の式典はチャペルで挙行された。壇上には村岡景夫先生を初め数名の先生がおられ

た。歴史を感じさせる木造のチャペルは重厚な雰囲気を漂わせていた。正面に向かって右側に掛けられていた新島襄先生の肖像画はそれほど大きくはなかったが、何かを訴えかけているように描かれていて存在感があった。肖像画の下には電子オルガンとピアノが置かれていた。式典が終わるとそれぞれのクラスに分かれた。1年3組は明誠館1階右側の一番奥にある教室だった。担任の金子先生は大柄な方でおおらかな感じがしたが、中学校生活で当面必要な説明を丁寧にしてくださった。話をされると先生の声はやや高音で細く、繊細でとても優しい方のように思えた。明誠館はチャペルとは対照的に明るく無駄なスペースのない現代的な建物だった。中庭に向かって廊下が続く、廊下に面した教室の壁には1年3組全員のロッカーが備えられていた。

1学期はすぐに始まった。早くから起きていた母は、父と私2人分の弁当を作っていた。6時40分に起きるとすでに父の姿はなかった。「お父ちゃんは8時から仕事から、6時半に家を出た」と母は言っていた。家を7時20分に出て都丘町のバス停から京阪バスに15分程乗り、枚方市駅北口で京阪電車に乗り換えた。電車は超満員で大人の間埋もれて身動きができなかった。同じ車両に同志社香里中学校の男子生徒と聖母女学院中学校の女子生徒が何人かいた。香里園駅東口の階段を下りると、同志社香里の生徒はぞろぞろと歩道のない21号線の左側を南方向に歩いた。聖母女学院の生徒はやはり香里園駅東口の階段を降りると、すぐ近くにあった関西西大付属病院の南側にある細い近道を歩いていた。21号線を5分ほど行くと西側斜めに降る坂があって、そこからはほとんど車が走っていなかった。郡元町・美井町と古くからの住宅街が続く、美井元町に入ると農家があった。その頃、同志社香里の周辺はのどかな田園地帯で池や田んぼ、林が広がっていた。山田小学校は徒歩5分の通学だったので、同志社香里への40分余りの通学はそれだけで興味深かった。

同志社香里に正門はなく、学校に着いてからも緩やかな坂道がだらだらと続いた。坂道の右側には2面のグラウンドがあり、まず下には野球用、少し道を行くと上にはラグビーやサッカー用のグラウンドがあった。体育の授業は上のグラウンドを使った。坂道の左側はしばらく墓地が続く、それを過ぎると池があった。池の向こうには2面を本館・チャペル・食堂に囲まれた庭があり、そこには「良心ノ全身ニ充滿シタル大丈夫ノ起り来タランコトヲ 新島襄」と刻まれたほぼ正方形の石碑「良心ノ碑」があった。中学生の校舎は明誠館で1階の右側が1年生、2階右側が2年生、3階右側が3年生の教室であった。4階右側には図書室があった。4階左側には音楽・書道・

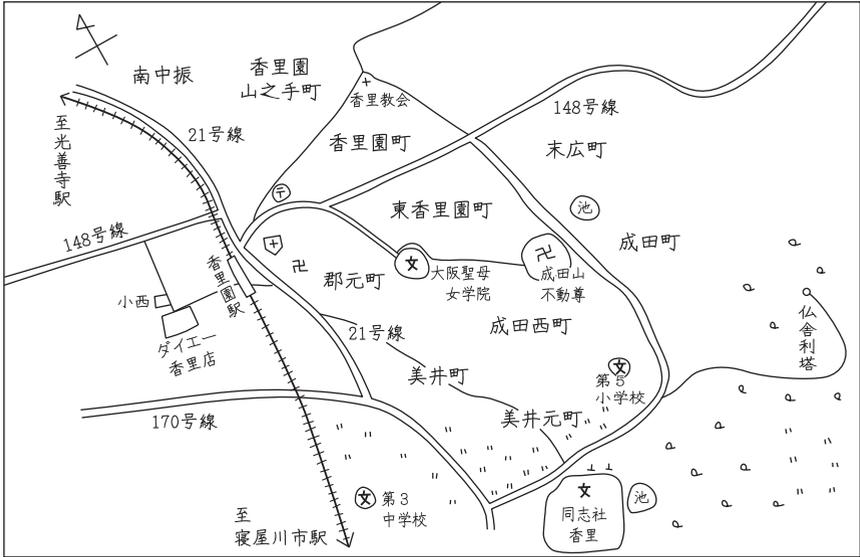


図1 1965（昭和40）年当時の京阪電車香里園駅周辺図

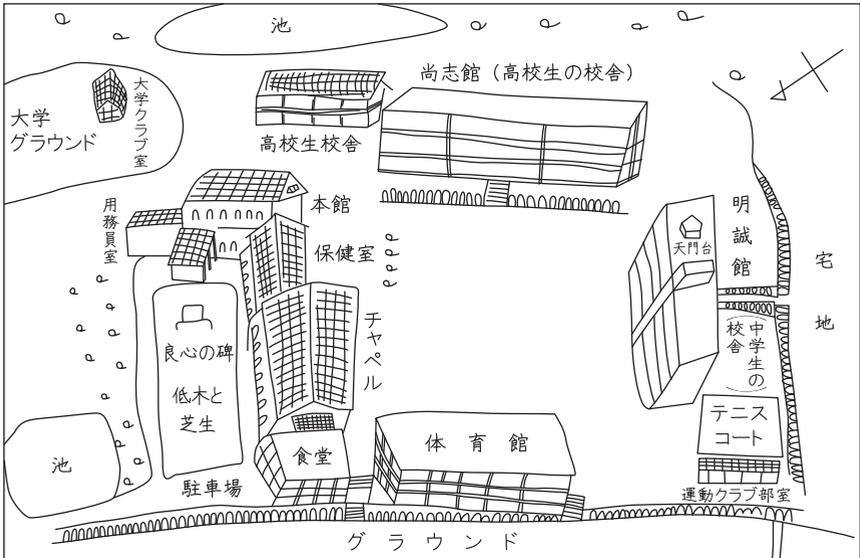


図2 1965（昭和40）年当時の同志社香里中学校・高等学校

美術といった芸術関係の教室が並んでいた。明誠館のすぐ西側にテニスコートがあり、その向こうには運動クラブの部室として使われていた木造で細長く古い建物があった。この建物はしばらくして取り壊され、体育館地階のピロティに運動クラブの部室は移転した。体育館1階には卓球場・剣道場・柔道場・レスリング場があった。2階の床全面は板張りになっていて、体育の授業は2階で行われた。バレーボール・バスケットボール・体操などの運動クラブは2階で練習をしていた。食堂の地階は購買部で、金券・ソフトドリンク・パンの他ちょっとした文房具を売っていた。1階が食堂で3か所の窓口があり、左端がきつねうどん(25円)と大盛りうどん(30円)、真ん中が中華そば(45円)、右端がカレーライス(60円)を売っていた。右端の窓口で定食(60円)を扱っている時もあった。ただ、ほとんどの中学1年生は弁当を持参していたので、食堂を利用する機会は稀であった。

*

中学1年生の授業は午前中に4時限、午後には2時限あり、午前中の1時限目が終わり2時限目までの間にクラスルームや週3回のショートチャペルがあった。土曜日は午前中に4時限の授業だけだった。ロングチャペルは月に1回程度だったと思う。授業では科目が変わるごとに先生が交代するので、休み時間に次のクラスの準備をした。体育は体操服に着替えて体育館かグラウンドに、音楽は4階の音楽室まで行かなければならなかったので時間的なゆとりはなかった。担任の金子先生は数学を淡々と教えられた。言葉の端々に同志社香里で教えるのを誇りに思われている気持ちが伝わってきた。何回も言葉をかけて下さったが、一度として勉強に触れられたことはなかった。優しい声で言われる内容はいつも「塩野君、運動部に入りなさい!」だった。2学期になって柔道部に入部したのは多分に金子先生の影響があるし、入部するとそれを金子先生に報告した。英語の担当は一瀬先生⁷⁾で、先生はいつも大きなテープレコーダーを持って校舎を歩き回っておられた。授業の途中で何回も間をおいてジョークを言われ、リスニングを中心に進められた英語の授業はとても楽しく生徒はいつの間にか引き込まれていた。先生が留学のため1学期だけで代わられた時はショックだった。国語の赤尾先生⁸⁾は、香里学園が同志社と合併して同志社香里になった時、同志社から来られた先生の一人だと聞かされた。先生は現代文を文法で明快に分析したうえで、手振り身振りを交えて文章の内容を深く教えて下さった。文章を通してその向こうに

ある豊かな世界や執筆者の思索を赤尾先生の授業を通して生徒は想像できた。豊かな国語の時間だった。ある事情があって2年生の2学期から時間があると図書室に通うようになった。毎日挨拶を交わした女性司書の方がその様子を赤尾先生に報告されたのであろう。購買部などで先生にお会いすると「塩野君は今、何の本を読んでいますか?」と声をかけて下さるようになった。

1年生で最も印象に残ったのは聖書科を担当下った西邨先生³⁾である。テナー歌手の西邨先生はアメリカ西海岸で音楽教育を研究されたそうで、「私はリベラルなクリスチャンであります!」と胸を張っておられた。いつも姿勢正しく、折り目のしっかり付いたブレザーを着て、紐で首にかけた定期券入れを胸ポケットに収めておられた。岡本清一『新島襄』⁴⁾をテキストにして1年かけて新島先生の生涯と教えを講義して下さった。先生から聖書を学んだ記憶は全くない。余談が授業に入らない日もなかった。初めの5回くらい出席番号順に一人ずつ生徒を立たせて、先生はこう尋ねられた。「A君、君はどこの小学校出身かね?」「はい。大阪市のS小学校出身です。」「そうかね。大阪市のS小学校出身かね。あれは良い小学校だ。頑張りたまえ!」ほぼ同じやりとりが10名ほど続く。ある日、いよいよ私の番になった。「塩野君、君はどこの小学校出身かね?」「はい。枚方市立山田小学校出身です」と返事すると先生は首をかしげられ、「枚方市立山田小学校、聞いたことのない小学校だ。しっかり頑張りたまえ!」と答えられた。山田小学校で正直に首をかしげられる先生を見た時、ほとんどの生徒に応えられた「あれは良い小学校だ。頑張りたまえ!」という励ましは口先だけのものでないことが分かった。余談の多くは同志社に関する事柄で、同志社を語る時先生はあまり夢中になり時間を忘れておられるように思える場合もあった。「同志社の校章には3つの三角があります。3にはいろいろな意味がありますが、同志社の教育をもよく表しているのです。知育・徳育・体育であります。知育に偏重した教育がありますが、知育だけが教育ではありません。知育・徳育・体育があわさって教育であり、これが同志社の教育であります。」新島先生について教える時、西邨先生はまるで無声映画の弁士のようにであった。新島先生誕生の場面では「新島先生の父民治と母おとみには4人の子供がいましたが、皆女の子でした。それでついに男の子が生まれた時」と言ってポンと机をたたき、「祖父民治は『しめた!』と叫んだのです。それで、新島先生の幼名は七五三太(しめた)となったのであります。」と弁治になりきっておられた。新島先生の最期を語られた授業は感動的だった。「病

状が優れない新島先生は温暖の地大磯の海辺で新年を迎えられます。そこで作られた詩があります。

歳を送り 悲しむを休めよ 病羸（びょうるい）の身
鶏鳴早くも 已に佳辰を報ず
劣才 たとい済民の策に 乏しくとも
尚壮図を抱いて この春を迎う

という作品です。この詩には死を目前にされた新島先生が同志社の教育と日本の国を想う真情があふれているのであります！」このように話された西邨先生の声は震え、眼にはうっすら涙があふれているようだった。我を忘れて先生が新島襄を語られる時、そこにはかつて見聞きした柴田勝正の熱い思いに通じるものがあった。だから、西邨先生の言葉と情熱は真直ぐに心と体にしみ込んだ。その真実を知るのに時間はかからなかった。1年生の12月に入部した柔道部では、練習の初めと終わりに黙想の時があった。黙想すると決まって「刀折れて止むるなかれ。矢尽きて止むるなかれ！」とか、「射る矢にこむる大丈夫の意地！」といった新島先生の言葉が力強く浮かんできた。それで「新島先生、見てください！」を呼びかけ、柔道の練習に励んだ。「刀折れて止むるなかれ」精神の柔道であった。黙想の時に交わした新島先生との対話、それは柴田さんや西邨先生の新島先生への情熱が私の魂に響いていた真実を証言している。

月曜日・水曜日・金曜日の1時限目終了後、9時20分から30分間実施されたショートチャペルに生徒は対照的な2つの反応を示した。静けさに包まれ厳粛な雰囲気の中で行われたチャペルと、初めから終わりまで私語が絶えず緊張感もしまりもないチャペルである。入学当初に強い印象を与えられたチャペルは前者であった。奏楽者の和泉先生（日本基督教団 寝屋川教会）が前奏を始められると会場は静まり、不思議な静寂の空間をオルガン演奏だけが心に語りかけるように響く。前奏で静まったチャペルの講壇にまず登場するのが讃美歌指導者としての西邨先生であった。颯爽と生徒の前に立った先生が好んで歌唱指導されたのは讃美歌90番⁵⁾である。「皆さん、『ここも神の御国なれば』で始まる90番という讃美歌はアメリカで広く愛され、今や日本でも歌われている讃美歌であります。私たちが住んでいるこの世界は何であるのか。讃美

歌90番はキリスト教信仰の立場からこの世界を「神の御国」と歌うのであります。さあ、歌いましょう！」

ここも神の御国なれば 天土御歌を歌い交し
岩に樹々に空に海に たえなる御業ぞあらわれたる

讃美歌90番を繰り返すうちに、「チャペルも同志社香里も神の世界」という不思議な感覚を持つようになった。中学1年生の私にとってチャペルと明誠館での授業は同志社教育の二つの中心となった。

秋になって久しぶりに枚方市三矢に柴田さんを訪ねた。突然の訪問にもかかわらず、「塩野か。よく来た、よく来た！」と歓迎して下さった。ひとしきり同志社香里中学校の現状報告を「そうか、そうか」とうれしそうに聞いて下さった後、柴田さんは「今日は塩野にやりたいものがある」と言って奥の部屋に行かれた。戻って来られた柴田さんの手には大きな1冊の本が抱えられていた。「この本はな、最近出版された『同志社九十年小史』という本や。2冊もらったから1冊は塩野に贈呈する。」と言って、見開きの頁に献辞を記して下さった。

謹 呈

同志社創立九十周年記念

柴田勝正

塩野和夫君

*

50人余りの同級生は地元の山本や中川、枚方市など近郊から通う久米や千田、京都から来ていた内座や吉田、大阪の久保や日下部とかなり広範囲から交通機関を使って通学していた。電車・バスを使った通学や科目ごとに先生が交代する授業など、初めての経験に緊張して生徒はすぐには打ち解けあえなかった。そんな生徒たちが緊張から解かれたのは昼休みであり、弁当を開いて不器用に話し始めた。初めの間だけ当番の者が用務員室まで走り、大きなやかんに半分余りお茶を入れてもらい教室へ運んだ。ほとんどの弁当はご飯が大半で、おかずは片隅に2割程度を占めているだけだった。

弁当箱と中身は実に多様で、家庭の雰囲気が伝わって来て面白かった。鞆に収まりやすいノート型の薄い弁当箱にご飯とおかずを整然と詰めた弁当があった。彼のおかずには必ず卵焼きとかまぼこが入っていた。少し厚みのある弁当箱でおかずは少ないが、ご飯の上一面にあざやかなでんぶをふりかけている弁当もあった。幅は半分くらいしかないが深みのある弁当箱でおかずにはたらこや卵焼きを雑然と詰め、ご飯の間には鰹節を挟み込んだものもあった。ざこちなく話し始めた話題の一つに親の職業があった。「塩野、お前の家は何をしてるんや?」「父は働きに行ってるから、サラリーマンというところかな。母はそろばんを教える。日下部、お前の家は何をしてるんや?」「うちはな、大阪の都島でガラス屋をしてる。」京都の仏具屋・農家・鉄工所・建築会社・役所など、同級生はいろいろな家庭から来ていた。そんな話の輪に加わらないで一人で弁当を食べている同級生がいた。Iである。中学3年生で彼は転校した。Iの席が空になった時、なぜかその転校が経済的な理由の様に思われ、あまり口を開かなかったあるいは開けなかった彼がとても気の毒に思えた。

11月も終わろうとしていた金曜日に、ほとんど表情を表に出さないKがにこにことうすら笑いを浮かべながら近寄ってきた。「塩野に頼みがある!」いきなりこのように切り出された。「挨拶を交わす程度の付き合いしかないKがどうしたのかな?」と思っていると、「おれな、柔道部に入りたいんや。けれど、一人では柔道場に行くにくい。それで、塩野につきあってほしいんや。来週月曜日の放課後、柔道場に行ってくれへんか。俺も行く。」「分かった。それじゃ、来週月曜日の放課後に柔道場で会おう。」翌週の月曜日は12月に入っていた。6時限目が終わって見渡すと、すでにKの姿はない。「先に行ったのかな?」と思い、体育館の柔道場に急いだ。道場の入口にもKはいなかったので待っていると、いかにもたくましい柔道部員が次々と来られた。一人から「見学か?」と聞かれたので、「はい、見学に来ました!」と答えた。すると、「そうか、柔道場は一礼をして入る。ついて来い!」と言われ、一礼して道場に入った。練習は正面に向かって一列に正座して「黙想、初め!」という掛け声が始まり、1分ほど後に「黙想、終わり!」で終わる黙想から始まった。2時間余りの練習は12月だというのに熱気でむんむんしていた。練習後の黙想が終わると、「道着を用意しておくので、明日放課後は部室に来るように。1週間程度練習に参加してみ、入部するかどうかは考えれば良い」と言われた。Kはついに来なかった。次の日、クラスで明らかに私を避けているKを見て、なんだかきつねに化かされているよう

な気がした。

翌日、火曜日の放課後に柔道部の部室に行くと、使いこなしているがきれいに洗濯された道着と新しい下駄が用意されていた。その頃1年生の部員には高鍋・楠木・中川・藤倉・森定がいて、柔道着の着方を初め何かと教えてくれた。それで柔道着に着替え、部室から体育館まで下駄を履き歩いて行った。一礼して柔道場に入ると、1年生は道場の清掃である。一人ずつ奥の窓側から入口の方へ一畳ずつ一列に並び、窓側の者から順々に道場の端から端まで掃いていった。私も最後尾について掃いた。練習になると一人だけ柔道場の隅に行き初めだけ先輩から受身の指導を受け、1時間くらい受身の練習を繰り返した。乱取りが始まると「塩野は時間を計り、見積古をするように！」と指示されたので、時計を見ながら練習を見学した。乱取りは4分10本くらいで、「始め！」と「終わり！」を合図した。やっているうちに、声はだんだん大きくなっていった。黙想して練習が終わると、1年生はまた道場を清掃して部室へ引き上げた。キャンパスはすっかり暗くなっていた。柔道部は高校生と中学生と一緒に練習をしていた。後に分かったことだが高校3年生は8月下旬に引退されていたので、当時は高校2年生の正木先輩・河津先輩・木内先輩・柴崎先輩・鳥飼先輩・越智先輩が最上級生だった。高校1年生には松浦先輩・植岡先輩・太田先輩・西島先輩・山邑先輩・佐藤先輩がおられた。中学3年生には江崎先輩・川床先輩・高井先輩が、中学2年生には東先輩・青山先輩がおられた。2日程柔道着に着替えて受身を練習すると、両肘と両ひざは赤く擦り傷ができ全身のあちこちが打撲で痛くなっていた。その上、風邪をひいてしまった。

「風邪は練習して汗を流せば治る！」と言われたが、まだ本格的な練習をしていなかった。それで土曜日までは制服を着て見学し、寝技や乱取りの時間を計っては「始め！」「終わり！」と声をかけていた。正式に入部を申し込んだわけではなかったが、2週目に入ると寝技や乱取りの練習にも加えられた。投げ技は川床先輩から右の体落としを教えていただいた。2時間余りの練習が終わると、心身ともにすっきりした。暗くなっていた帰路は森定と急いだが、途中にある駄菓子屋に必ず寄った。どのグループも帰路にはどこかに寄っているらしかった。冬休みは正月三が日を含めて5日間程度休んだだけで、他の日は朝から練習をした。冬休みの練習は寒いので体を温めるためにランニングから始めた。1時間ほど裸足で砂利道を仏舎利塔まで往復するのである。冷え切った足に砂利は突き刺すように痛かったが、走っているとそれほど気

にならなくなった。3学期に入っても寒い日は仏舎利塔へのランニングをしたので、その日は練習時間が短くなった。ランニングをしない日は初めにたっぷりと寝技をして体を温め、それから乱取りをした。2月に入って主将の正木先輩から声がかかった。「5月に大阪府の中学生柔剣道大会がある。中学2年生の重量級と中量級は選手が決まったが、軽量級がない。塩野が一番軽いので、軽量級は塩野にしたい。いいか?!」「はい、分かりました。」こうして、初めての試合を5月に行うことになった。しかしその時の体重は51キログラムで、軽量級は45キログラム以下が条件であった。

(2)

1966（昭和41）年4月、2年生になると同志社香里中学校・高校の校長が大橋寛政先生に代わった。愛車のフォルクスワーゲンで登校される先生のお父様⁶は目に障害を持った牧師で、近江八幡市において活躍された方だと聞かされた。いかにも実直そうでどっしりと構えた大橋先生の印象は、前任の温厚な村岡景夫先生から受けるものとは違っていた。中学3年生の時、一人の高校生が自殺した。その責任を取って大橋寛政先生は年度の終わりに校長を辞任し、聖書科の一教員となられた。高校1年生の聖書科を担当して下さった大橋先生は、クラスで必ず自殺した高校生に触れられた。「夏目漱石に『則天去私』という言葉があります。『天に則して私を去る』という境地を語った言葉ですが、この言葉を誤解して自殺した高校生がいました。しかし、それは誤解なのです。皆さんは決して命を絶ってはなりません！」不器用に語られる一言ひと言に先生の生徒に対する真情が響いていた。

2年1組の担任は西島先生だった。体育を担当する先生方の中では小柄な先生はきびきびした身のこなしで、眼光鋭く生徒の様子を隅々まで観察しておられる感じがした。学校生活にも慣れ規律の緩みが出始めた生徒に対して、あのように少々威圧的な態度が必要であったのだろう。6月になって、西島先生がチャペルを担当された。その日は「西島先生がどんな話をされるのかな？」と興味津々で出席した。壇上にはいつもの様子と違う緊張した面持ちの先生がいた。あの高い声で切りだされたのは「体育館の下駄箱」についての話だった。体育館シューズと履き換えるために体育館の玄関には下駄箱があって、脱いだ靴はそこに収めることになっていた。「ところが、最近脱いだ靴を下駄箱に入れられない生徒が増えている。そのため玄関は脱いだ靴であふれ、雑然としている。この乱れようは生徒の皆さんのしまりのない心を表している。

玄関という場所は整理整頓が大切であって、引き締まった心を持ってそれを行動に表してほしい。体育館で靴を脱いだなら、必ず下駄箱に入れる様に！」という話で、なぜか記憶に残っている。

夏休みが終わり2学期になると、一層風紀に乱れが目立った。週刊誌を持ち込み教室で回し読みする生徒がいた。休み時間になると、ひそひそとセックスの話ばかりしているグループもあった。日本の地理を教えて下さった喜多先生が「大体、2年生になると助平になる。しかし、授業中に週刊誌の回し読みはいかん！」と注意されたのも9月であった。西島先生も折々に風紀の乱れを注意されていたが、10月に入って生徒に真剣勝負を挑まれたことがあった。その日のホームルームにいつもとは違う表情で現れた先生は「俺は今日、皆と真剣勝負をしたい！」と切り出された。生徒は先生の迫力に圧倒されて、静まり返っていた。「何度注意しても君らの態度は改まらない。それで心を入れ替えて真面目にするか、それとも態度を改めないか。俺は職を賭けて皆と勝負したい。どうだ！このまま不真面目な態度を続けて俺を止めさせるか、それとも真面目になるか。しっかり考えてくれ！」と言って西島先生は教室を後にされた。

ようやく2年1組が落ち着いたので、11月に入って一連の出来事を報告するため柴田さんを訪ねた。いつものことながら、突然の訪問にもかかわらず柴田さんは「塩野か、よく来た、よく来た。上がれ、上がれ！」と招いて下さった。仕事場兼書斎の部屋にお邪魔すると、奥様が「まあ塩野さん、立派になられて。柔道部に入られたそうですね、お父様から伺っております」と言って、紅茶を出して下さった。一通りの挨拶を終えると、最近のクラスにおける風紀の乱れと喜多先生の注意、そして西島先生の迫力に満ちた真剣勝負について話した。「そうか、そうか」と頷いていた柴田さんは私の話が一段落すると、「塩野はステーキを食べるか？」と聞かれた。「いただきます」と答えると、お宅のすぐ裏で淀川に面して建つマンションの1階にあったステーキハウスに案内された。店のカウンターに座りステーキをご馳走になりながら、同志社の教育について話し続けた。あんなに柔らかくおいしい肉をいただいたのは初めてだった。

*

5月に開催される大阪府中学生柔剣道大会に出場するために、2月から減量を始めた。まず、食事の量を制限した。1か月ほどで3キログラム減った。3月には「この

調子でいけば、試合に十分間に合う」と楽観していたが、それからが思った様に減らない。4月になって体重は47.5キログラムである。そこで、ごはんなどの炭水化物は取らないで少しのタンパク質と野菜だけの食事にした。母は「そんなことしていて、病気になるか？」と私の体を心配してくれた。心配する母には「大丈夫！」と声をかけ、試合前の1週間は水分も制限してようやく45キログラムになった。試合当日京阪電車までは一人で行ったが、仲間を見るとまともに歩けない。それで左右から二人に両肩を支えてもらい、会場の大阪府立体育館に到着した。無事計量を終わると木内先輩が買ってきて下さったコーヒー牛乳を飲んだ。甘さが口から喉にしみいり、本当においしかった。試合が始まった。いつもは高校生の先輩と練習しているので、ふらふらの体でも全く負ける気がしない。5回ほど試合をして、2度は寝技で一本勝ちした。後は引き分けたが、いずれも抽選で勝った。あっという間に準決勝戦である。ところが、ふらついている私を見た審判の先生が試合の続行はとても無理だと判断し、了解を取った上で相手の不戦勝とされた。こうして、初試合は終わった。結果は大阪府大会3位である。試合が終わると、木内先輩が買って下さったパンをいただいて、帰途についた。試合の報告をすると父はとても喜んでくれたが、母は体を心配していた。

試合が終わって翌週の月曜日、チャペルで通常のプログラムが終わってから司会者に名前を呼ばれて壇上に上った。何かと中学生全員が注目している前で、大橋寛政校長が表彰状を全文読みあげ授与して下さった。表彰状を脇に抱えて2年1組に帰ると、私を囲んで大騒ぎである。クラスメイトが次々に挨拶に来て、「塩野、やったな！」「おめでとう！」「塩野は同志社の三四郎や！」とお祝いしてくれた。久保からは「お祝に鉄の下駄を作ってもらおうと思うが、受け取ってくれるか!？」という申し出である。「ありがとう。喜んでもらうよ」と答えると、1週間ほど後にお宅で作ってもらった鉄下駄を持ってきてプレゼントしてくれた。久保の家は大阪で鉄工所をしていた。その日、夜の都丘町を鉄下駄を履いて歩いてみた。数歩歩くのは何ともないが、しばらく歩いていると足腰にかなりの負担が来る。足腰を鍛えるにはいいが、問題は音である。歩くとアスファルトの道にカチン！カチン！と高い音が強く響く。まして夜である。1週間ほど歩いた後に、近所迷惑を考えて歩くのは止めた。それでも、長い間玄関に鉄下駄を置いていた。

試合から帰った夜、「大分無茶をしたから、明日鳥海さんに診てもらっとき！」と母は強く受診を勧めた。それでチャペルで表彰された月曜日の放課後は体調不良を理

由に柔道の練習を休ませていただき、中宮東之町の府道144号線沿いにある鳥海医院を訪ねた。自宅から少し遠かったが、その頃近所でも評判の医院であった。鳥海先生には2月以来の減量の様子や試合について正直に話した。検尿し、血圧を計り、聴診器で診察した後に、「かなり無理をされましたね。血圧もあがっています。しばらくは柔道の練習を休んだ方がいいでしょう。若年性高血圧で診断書を出しておきます」と言われた。医院を出るとすでに夕方であったが、なぜか真直ぐに自宅へ帰る気がしなかった。かつて五郎川君と新聞配達をしたことを思い出し、自然と足は中宮第一団地の方へ向かった。第一団地の手前に百済神社がある。百済王の末裔が大和朝廷に仕えて百済寺を建てた。その跡地に設けられたのが百済神社である。神社から見下ろす天の川やかささぎ橋という名称は百済を偲んで付けた名前だと聞いていた。神社の入口に石で造った高さ2メートル余りの小さな鳥居があった。鳥居の下は数段の石段になっていたの、そこに座った。見上げてよく見ると、鳥居の上いくつもの石が乗っている。幅20センチメートルほどの鳥居の上に誰が石を置いたのか。何度も試みてやっと一つの石を乗せるのに成功したのだろう。その人はきっと何かの願いを込めて石を投げたのだ。それはどんな願いだったのか。けれども目標であった試合を終え、疲れ切った私には何の目標もなかった。柔道の練習は5月いっぱい休んで見稽古を続け、寝技や乱取りの時間を計っては「始め!」「終わり!」と声を張り上げていた。

6月に入って練習を再開した。練習はきつかったが、もやもやしていた気持ちは消えてすっきりした。柔道はやはり練習である。1学期が終わると、7月下旬から8月上旬にかけて1週間の合宿に金沢へ行った。部長の野原先生と小川先生⁷⁾が同伴して下さった。大阪駅の小便小僧の前で集合し、富山行の雷鳥に乗った。高鍋・中川と3人で座っていると、車内販売の方が来た。「冷凍ミカンを買おう!」と言いだしたのは高鍋で、3人で分け合って食べた。冷たくておいしかった。金沢に着くと市電に乗って寺町にある宿舎の寺に行き、住職に挨拶をした。宿舎から50メートル程行った道沿いにある魚屋の2階座敷で3度の食事をいただいた。金沢は魚と空気おいしい町だった。兼六園の隣にある県立体育館に午前中は出かけ、毎朝石川県特別機動隊の方々の胸を借りて3時間の練習をした。機動隊員の胸は分厚く腕は太く堂々とした体格の持ち主ばかりだった。3時間の練習中、皆ゴムまりのように何度も投げ飛ばされていた。高校生の先輩があんな簡単に投げられるのを見たのは初めてだった。一度練習しただけでくたくたになった。宿舎に帰り昼食をいただくと、午後は金沢市内に

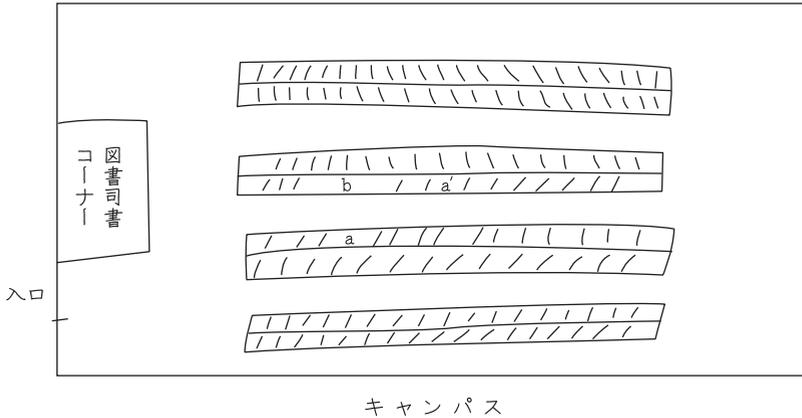
ある高校へ練習試合や合同練習に出かけた。そんな練習漬けの日々が1週間続く。野原先生は「あんなにきつい練習をしているよりも、一日中街角に立たされていた方がましだ」と言う先輩もいたと笑っておられた。中学2年生の合宿では午後から1日だけ休みがあり、兼六園を見学した。近くの喫茶店で先輩からかき氷をご馳走になったのはその時である。中学3年生の合宿でも午後から1日だけ休みがあり、その時は内灘海岸へ海水浴に行った。宿舎の寺院の裏はかなり広い墓地になっていた。最後の夜は宿舎でろうそく1本の灯りの周りに全員集まり小川先生から実話とも怪談とも分からない恐い話を聞かされ、一人ずつ墓地へ出かけていった。肝試しである。途中で高校3年生の先輩が幽霊の様な衣装を着ていたりこんにゃくを投げつけたりして、後ろから「うわあー！」と出てこられた。最終日は練習をしないで東尋坊で泳いで大阪に帰った。階段を這って登りたいほど、みんなくたくただった。

*

金沢での合宿から帰ると、柔道部は1週間ほどの休みに入った。初めての合宿での疲れが心身に溜まっていたのか、あるいは極度の緊張感から解放されてある種の虚脱状態にあったのかもしれない。宿命ともいえる直感が全身を覆ったのはこの時である。その日の午後、久しぶりにそろばん教室にいて、小学生の時よくしていたように両手で机に手をつけて飛び遊んでいた。その時である。「人は死ぬ！お前の父も、母も死ぬ！いやお前も死に向かっている存在である！」という直感が突然襲ってきた。人の死の不気味さは小学校3年生の時に参加した同級生のご両親のお葬式で知っていた。しかし、いわばそれは他人の死であり、直接には関わりのない所で生じた死であった。この時直感したのはそのような人ごとの死ではない。その様なものではなく、最も身近にいてその人がいなくては生きていけない者、つまり父の死であり、母の死であった。さらに私自身が死を運命づけられており、それゆえに「死の問題を解決しないでは本当には生きていけない！」と痛感した。

死に向かっている存在という自意識が昨日までの自分と今日の私を変えてしまっていた事実に気付くのに時間はかからなかった。2学期が始まると、次々と先生方に質問を浴びせた。「先生、人間は死に向かっている存在です。この問題を解決しないで勉強しても、何の意味がありますか？」20代後半で世界地理の先生は正直に「僕にも分からない。しかし、中学高校の時ほど広く学べる時はない。これも大切なことだ

学 外



キャンパス

a : 人生論の本が並んでいた辺り**a' だったかもしれない****b : 宗教書が並んでいた辺り**

図3 記憶による1966(昭和41)年当時の図書室

よ！」と誠実に答えて下さった。国語の正木先生は少し顔をゆがめて「塩野君、君は感受性が強すぎるよ！」ととともに答えてもらえなかった。英文法の中島先生は質問されると、困惑した様子でニタニタと笑い何も言わないで立ち去って行かれた。中学3年の担任で国語を教えて下さった浜里先生は黙って質問を受け止めた後、卒業式の日に応じて下さった。それは私を感動させるだけの内容だった。高校2年生の担任で倫理社会を担当された木村先生は「塩野、キルケゴールを読みたまえ！」と言って、白水社のシリーズを紹介して下さいました。

先生方に尋ねるだけではなく自分からも積極的に答えを求め、わずかな時間があれば必ず図書室を訪ねるようになった。そこにはいつも図書司書の女性が一人でおられるだけで、生徒は一人もいなかった。先生を見かけることもなかった。図書室に入るとすぐ横に司書がおられるコーナーがあって、そこからは図書室全体を見渡すことができるようになっていた。図書司書のコーナーとは垂直方向に並行して生徒の目の高さくらいの本棚が4列ほど並んでおり、その両側に本が納められていた。図書室に入って少し右側でキャンパスに向かう側のコーナーに人生論を叙述した本が置かれていたと思う(図3)。初めに読み始めたのはここに並べられていた本で、青春論・人

生論・生きがいなどについて書かれていた。そこで興味を持ったのは人生と時について記した数冊であった。しかし、冷静に書かれた時の経過に関する叙述からは、問題の解決を期待できなかった。ふと見ると、人生論が並ぶコーナーと向き合った書架に宗教書が並んでいた。その頃、最も身近に感じていたのは仏教である。そもそも塩野家は浄土真宗本願寺派妙教寺の檀家であり、住職の西本さんには幼児より親しみを覚えていた。それで満足できなかった人生論関連の本を読むのは止め、宗教書なかでも仏教関係の本を読み始めた。そこで出会ったのは唯円が書いたとされる『嘆異抄』である。

弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばず、ただ信心を要とすとしるべし。

たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。

善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。

親鸞は、父母の孝養のためとて、一辺にても念仏まうしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。

親鸞の言葉の背後にはどっしりとした彼の実存があった。彼の言葉は深く力強く生きていた。難しくて十分に理解できず説明できなくても、その言葉に込められた真実は直感できた。そこには死や無力さと向き合いながらも、信心においてそれらを超え父母の生死さえ超えた安心の世界があった。親鸞は弥陀への信心によって、死に向かう自分を超えて生きている。ここに確かに解決があった。しかし、「阿弥陀とは誰なのか？」この一事がなお問いとして残った。

2月になって母から思いがけない話があった。「下村校長先生やけど、和夫にお願いがあった。この春6年生になる子で同志社香里中学校に入学を希望している男の子がいる。4月から塩野君にその子の家庭教師をしてもらえないかと言われるんや。どうする？」母はすでに下村校長には前向きに答えているらしい。「どうする？」と聞かれても、無碍に断るわけにもいかない。それにしても中学生の家庭教師なんて聞いて

たこともない。とりあえず一度お会いすることにした。甲斐田のお宅を訪ねると、少し前までは農業をしておられたらしい。立派な主屋とその隣には牛を飼っていたと思われる小屋、そして農機具などを収めた広い納屋があった。男ばかりの3人兄弟で長男の竹内勤君が4月から6年生になる。彼の家庭教師を依頼された訳である。条件を出した。それはかつて西邨先生から教えられた同志社教育に関する考えそのものである。「教育には知育・徳育・体育があると同志社では習っています。お引き受けすればもちろん知育が中心になりますが、時に徳育や体育も行ってみたいと思います。それでもよろしいでしょうか？」竹内のお母さまからは「そういうことで、一つよろしくお願いします」と依頼された。4月から週2回、彼の家庭教師をすることになった。アルバイト料は1か月に3,000円である。

(3)

1967(昭和42)年に中学3年生になったが、その前に中学生2年生全員揃って修学旅行に行った。近鉄電車で大阪天王寺から名古屋まで行くと、後はクラスごとに分かれてバスに乗った。名古屋から三河台地を横切って浜名湖を渡ると浜松だった。2年1組のガイドさんは高校を卒業して間もない若い方で、浜名湖の西にある新居町の方だった。ガイドは新米とのことだったが、みんな静かに彼女のアナウンスを聞いていた。浜松からは遠州灘沿いに東へ御前崎まで走った。そこで休憩してから相模湾沿いに三保ノ松原・日本平・十国峠に立ち寄って、バリーが来航した浦賀に着いた。そこからフェリーで対岸の房総半島に渡り、バスで太平洋に沿って銚子まで行き、潮来でゆっくりした。帰路は東京から新幹線に乗った。バスに乗りつづけ、名所旧跡を訪ねる旅行であった。

3年2組の担任は鹿児島出身の小柄で明快に語る浜里先生であった。先生は鹿児島へのこだわりを持っておられた。彼のおじいさんは西南戦争で西郷方に参加された。城山での最後の戦いの前日、西郷は残っていた若者を集め「命を大切にするように！」と諭し、下山を命じた。おじいさんも下山を命じられ泣く泣く山を降りた一人であったという。教育に情熱を注いでおられた先生は熱が入るとツバキを飛ばす癖があり、教壇近くにいた生徒は嫌がっていた。クラブ活動では長くテニス部顧問を務められ、退職後も関わりを保っておられた。リベラルな先生は組合活動にも熱心で、1967(昭和42)年に初めて建国記念の日が実施された時は学内で反対集会を企画された。

大柄でおっとりとした口調の浜本先生は何かと浜里先生とは対照的だった。日本史担当の先生は同志社と合併する以前から香里学園に勤務しておられたと聞いた。職業軍人のお父様は陸軍中将で本人も若くして陸軍の将校であったという。舌足らずな言い方で面白おかしく話され、生徒を引き付けておられた。「戦後間もなくの野球部というのはだな、君（チミ）たち。実によくやっていたんだ。俺はああいう精神を大切にしてほしいんだ。」「俺がだな、君（チミ）たち。名神高速道路で走っていると速度違反というので捕まったんだ。俺の愛車は坂道ではいくらアクセルをふかしても30キロメートルしか出ないんだ。」「初めて建国記念の集会をするというので、君（チミ）たち。俺は饅頭を買ってお祝に駆け付けたんだ。そうしたら何か様子が違うんだ。」初めて実施された建国記念の日をめぐる2人の先生の対応は違いが際立っていた。

2年3年と聖書科を担当されたのは佐野先生である。先生は聖書やイエスの教をテキストに基づいて的確に教えて下さった。チャペルの時は後方に静かに立っておられ、私語をする生徒に注意しておられた。型破りな西邨先生とは何かと対照的な先生だった。しかし、西邨先生や大橋先生から伺った話は耳に残っているのに、佐野先生の話はなぜか思い出せない。

*

中川は中学2年生の秋に初段を取り、同級生では一番早く黒帯をしめた。その中川が中学3年生の春には退部した。楠木も中学2年生の途中で退部していた。藤倉は3年生の秋に結核を患い、枚方の厚生年金病院に入院した。お見舞いに行くと、看護師の一人が幼馴染であるみっちゃんのお母さんでびっくりした。藤倉はそれ以後入院を繰り返したが、退院すると柔道場に現れた。去っていく仲間もいれば、新たに加わる同級生もいた。私のすぐ後に入部したのが加藤である。3年生になるとYも入ってきた。中川が黒帯を取ったので、先輩はしきりに昇段試合への出場を勧められた。始めて参加したのは中学2年生の1月で場所は大阪城内の修道館、参加費が500円であった。その頃、投げ技を右の体落としから左の低い背負い投げに変えていた。それが良かったのだろう、急に動きが良くなり投げ技でも一本勝ちができるようになっていた。試合相手は自衛隊の隊員で立派な体格をしていた。お互いに掛け合う技が決まらず勝負はすぐには決まらなかった。しかし、試合も後半に入ると振り回されるようになり、振り回されてかけられた技で一本を取られ負けた。野原先生からは「力も技

のうち！」と言われ、本当にそうだと思った。2度目の昇段試合は中学3年生の4月に受けた。場所はやはり修道館だった、この時は5人一組となり、4人と試合をした。同じ組には高校生が2人と警察官が一人いた。体格では明らかに劣っていたが、力負けはしなかった。試合は背負い投げによる一本勝ちや足技で崩してから寝技に持ち込む合わせ技による一本勝ちで4人全員に勝った。こうして初段になったが、加藤と高鍋もすぐに黒帯をしめた。6月の大阪府中学生柔道大会団体戦は黒帯を締めて初めて出場する試合となった。先鋒だった。2回戦の相手は白帯で明らかに緊張していた。試合が始まってすぐ背負い投げを掛けて来た。不意を突かれ思わず左手をついたが、手首が膨らんでいる。審判に見せると、「骨折しているが、試合は続けるか？」と聞いてくる。痛み分けは団体戦では負けになるので「続けます！」と応え、試合は再開した。しかし、審判は何度も試合を中断して、「骨折しているが、試合は続けるか？」と聞く。その度に「続けます！」と答え、ようやく引き分けで試合は終わった。直ちに応急処置をしていただいたが、この時は顔が真っ青になるほど痛かった。帰りには枚方市駅近くにある小田原整骨院に寄ったが、ここでも処置は痛くて顔色が真っ青になった。

中学3年生の4月になって竹内勤君の家庭教師を始めた。柔道の練習を終えて彼の家に着くと、7時前である。それから2教科を2時間で教えた。週2回行ったので、1週間で4教科すべてを見ることができた。問題集は3月の間に調べ数種類買っておいた。中沢のお兄ちゃんがそうして下さったように、まず問題を解かせて間違った所を説明してあげた。科目が代わる時には自由な話し合いの時をしばらく持った。竹内君は楽しくひょうきんな性格で周辺を和ませてくれた。私はなるべく分かりやすく新島先生の事、教育の事、人生論を話した。相撲をとったり、レスリングをして過ごした時もあった。勉強の間、彼は伸び伸びとしていた。勉強が終わると、夕食をご馳走になった。お父さんやお祖母さんを初め、遅い食事には家族全員が揃って下さった。お父さんがいると、竹内君は神妙にしていた。自宅に帰ると、10時を回っていた。

1学期の中間試験が終わると、英語リーダーの那須先生から職員室に呼び出された。「塩野！中間の英語どうしたんや。平均点もないやないか。調べてみたら、他の科目ではトップクラスの成績を取っているものもある。実力はあるんやから、しっかり勉強せんといかんで！」深く頭を下げて職員室を失礼した。2年生の2学期以降、成績は急降下し低迷していた。特に英語がひどかった。しかし、あの頃には違った所に関

心があり、どうしても勉強への意欲がわかなかった。図書館通いは親鸞の言葉との出会いにより、中学3年生になった頃には終わっていた。しかし、「阿弥陀仏」の実在性に対する疑問は次第に膨らんでいた。親鸞が生死を超えた真実を生きたことは確かである。しかし、彼が根拠とした「弥陀」、即ち「阿弥陀如来」の実存をどのように考えれば良いのか。「阿弥陀仏は長年にわたる仏教徒の信心が作りだしたもので、いわば信心の結晶ではないか。」そのようなことを思いめぐらしていた時に、ふと思いついたのが「イエス」である。イエスが実在したことだけは間違いない。この点において阿弥陀様とイエスは明確に違う。しかも、実在したイエスをキリスト教徒は「キリスト」と信じている。人間イエスは本当にキリストなのか？2つの可能性が考えられる。「イエスは彼の大ほら吹きによって何かの間違いでキリストとされた」のか、それとも「イエスは本当にキリストだった」のか。中学2年生の夏に生死の問題から始まった宗教的関心は親鸞の「弥陀への信心」を経て、中学3年生の5月にはイエスに向けられていった。キリスト教は仏教に次いで身近な宗教でもあった。

本間俊平の娘婿と聞いていた石野先生は白衣を身につけて物理を教えておられた。生徒とのやり取りがぎくしゃくしてうまくいかない場合もあったが、実直そのものの先生である。6月に入って教会について尋ねたのはこの石野先生である。物理の研究室に先生を訪ね、「良い教会を紹介して下さい」とお願いした。石野先生は「それならば大里先生がいいでしょう。先生の教会は香里教会で、成田不動尊を通りぬけて左に曲がり真直ぐに行った所にあります。早速行ってみるとよいでしょう」と教えて下さった。6月第2週に入った次の日曜日に教えられた通り成田不動尊を通りぬけた所の道を左に曲がったが、その時雨が降ってきた。かまわず真直ぐに行くと途中で道が細くなったが、さらに行くと左側に教会があった。玄関に立つと小柄な女性が出て来られて「まあ、雨にぬれられて」とタオルを出して下さい。それが牧師夫人の大里和子さんだった。「中学生なら、中学生の分級がいいでしょう」と案内された部屋には、大学生の平田さん（男性）と松本さん（女性）を先生として数人の中学生がいた。教会学校の校長は京都大学教員の中西先生だった。それ以来、教会学校の礼拝と分級に休まずに通った。柔道の夏合宿が終わるとすぐに、1泊2日で教会学校の夏の修養会があった。淡路島の岩屋に出かけ、テーマは「世の光、地の塩」であった。先生方が次々とテーマに沿った講話をされた中で、同志社大学の学生であった粟飯原先生は海岸における夕陽会で「この海は世界につながっています！」と切り出し、キリスト

教青年の世界規模での交流について紹介して下さった。2学期になると同級生の千田や中岡を教会に誘った。

*

10月も中旬に入った頃、同級生で柔道部部員のYが廊下の隅に招き「塩野に頼みがある」と言って、制服の胸元を開き胸ポケットの辺りを示して見せた。そこには手紙らしいものが見えた。「塩野、一生のお願いや！今度の11月3日柔道部の練習を休んで俺と一緒に聖母女学院の文化祭に行ってくれ。この手紙をどうしても渡したい人がいるんや！」と頼まれた。無断で練習を休むと、柔道部には厳しい練習が待っていた。だからと言って「聖母女学院の文化祭に行きますから、練習を休ませて下さい」とも言えない。それで「大勢の人が集まる文化祭でどうやってその人を捜すんや？」と聞いた。「皆が通る聖母女学院の道に立って、彼女が来るのを待つ。きっと会えるはずや。来たら手紙を渡す。それまで俺と一緒に立って待っていてくれ。文化祭の入場券は2枚用意した！」Yは実に真剣だった。仕方がないので願いを聞くことにした。11月3日は香里園の駅で待ち合わせ、聖母女学院に向かった。初めて入るキャンパスをざっと歩いてみて選んだのは、中央辺りで多くの生徒が行き来する通りの前だった。朝の9時すぎから2人並んで立っていると、同志社香里の同級生が何人も聖母女学院の生徒と連れだって歩いて行く。「何してるんや？」と声をかけてくる同級生もいた。そんな時、私に近づいてきた一人の女子生徒がいた。よく見ると、都が丘町のバス停で時々会う聖母女学院の生徒だった。彼女はカレーの食券を出しながら、「よかったら食べに来て下さい」と渡してくれた。けれども目当ての女子生徒を見つけることはとうとう出来なかった。夕方になったので、がっかりして肩を落としているYを促して、聖母女学院を後にした。意気消沈していたYが何とも気の毒だった。けれども、そこまで一途になれる彼を素晴らしいとも思った。間もなくYは柔道部を止めた。同志社香里高校を卒業すると、フランス料理の勉強を始めたと聞いた。カレーの食券をくれた女子生徒とは学校の帰りにあったので、都が丘町のバス停でお礼を言い10分ほど話した。それから会うと挨拶を交わすようになった。

教会に熱心に通い始めたのを見た母が、「井（わかし）のおばちゃんもクリスチャンで教会に通ったはるで」と教えてくれたのは11月も中旬であった。井さんはそろばん教室を背にして建てたたこ焼き小屋で毎日たこ焼きを売っているおばさんである。

「こんなに近くにキリスト教関係の方がいたのか？」と驚き、「聖書を一緒に勉強しませんか」と声をかけてみた。すると「聖書の話聞かせて下さい」と応えて下さった。それで、家庭教師に行く日を除いて一緒に聖書を学ぶことにした。次の日から柔道の練習を終えて帰ると50円玉一つを持って、たこ焼き屋に走り10個を買い食べた。それから、私がヨハネ福音書を読み解説した。聖書の説明に耳を傾けていたおばちゃんは解説が終わるのを待って話し始められた。おばちゃんの話は「おいしいたこ焼きの味の秘密・いつも寄って下さるお客さん・小さい子供を残して亡くなって行った旦那さん・不憫だけれど小さな子供に一合のお酒を買いに行かせたこと・旦那さんの最期の時の様子・借金に回った時のつらさ・途方に暮れ吊革につかまって居眠りしていた時に現れた天使」などであり、それら一つ一つの話にはおばちゃんの大切な人生が込められていた⁸⁾。中学3年生の冬に最初に聖書を一緒に勉強したのはたこ焼きを焼いて子供を育てたおばちゃんだった。この事実は今日まで私のキリスト教理解に決定的な意味と方向性を与えている。

中学3年1組の担任浜里先生は中学校卒業の日に大きな声で歌って下さった。それは山陰地方で地引網を引き上げる時に皆で歌う労働歌だった。歌い終わると、生徒一同を見渡してから高校生活に入る私たちを諭し話して下さった。

今歌ったのは、山陰地方における労働の歌です。中学校を卒業すると働きに出る人たちがいます。労働は人間にとって何よりも尊い行為です。しかし、諸君は労働する代わりに高校に進み勉強します。だからしっかり勉強して下さい。働いている人たちに恥ずかしくないように勉強に打ち込んで下さい！

先生の一語一語が心を打った。「死に向かっているのになぜ勉強しなければならないのですか？」という問いに対して、「分からなくても勉強はするものだ！」と浜里先生は応えておられた。勉強への責任に関する論は高校生活への何よりのはなむけの言葉となった。

中学卒業を控えていた3月に思いがけない来客があった。中沢のお兄ちゃんである。一通りの挨拶を終えると、中沢さんは「塩野は同志社なんかに行く人間じゃない！東大か京大の社会学系の学部に入學し、卒業すると官僚か大会社の重役になると良い。」と言い、具体的に受験勉強の仕方までアドバイスしていかれた。何となく高校

を終えると推薦で同志社大学へ行くものだと思いこんでいた者にとって、その言葉は衝撃であった。しかも「成るべき者になれ！」というアドバイスは、これから進む高校生活の本質を鋭く問っていた。このようにしてさまざまな可能性をはらみながら同志社香里高校へと進学した。

注

- 1) 一瀬昌夫先生は、後に帝塚山大学短期大学部・梅花短期大学に移られた。C. サンドバーグ (Carl Sandburg) などを研究された。下記の翻訳がある。
エリザベス・ローザ・ニュービー、一瀬昌夫訳『エリザベスの軌跡—メキシコ系アメリカ女性の物語』日本基督教団出版局、1986年。
- 2) 赤尾秀之助『同志社百年史 通史編2』1423頁。なお、赤尾先生は西南学院大学における敬愛する同僚赤尾美秀先生のお父様でもある。
- 3) 西邨辰三郎『同志社百年史 通史編2』1437・1411・1415・1418・1420頁。
- 4) 岡本清一『新島襄』同志社大学出版部、1965年改訂版。
- 5) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌』日本基督教団出版局、1954年。
- 6) 大橋五男 (1881-1963) 少年の時に失明し、同志社に学ぶ。いくつもの教会で働いた後、1933年に滋賀県近江八幡の近江兄弟社に入った。下記の本がある。
大橋寛政編『あめにたから—盲人牧師大橋五男の生涯—』1964年。
- 7) 小川与四郎『同志社百年史 通史編1』350頁、小川先生には下記の著作がある。
小川与四郎『新島襄の漢詩』同志社新島研究会、1979年。
- 8) 「たこ焼き屋のおばちゃん」(塩野和夫『一人の人間に』50-54頁)